

# 「動詞連用形＋名詞」の複合名詞における動詞の「スル／シタ」形\*

鄭 汀

上海对外貿易学院

「動詞連用形＋名詞」によって複合される複合名詞は、その動詞語幹の名詞に対する修飾関係がしばしば「動詞スル形」と「動詞シタ形」の2つに意味解釈できるとされる。しかし、その両者が何によって決まるかについては詳しく言及されたものは少ない。本稿では影山(1996, 2001, 2009)の動詞の意味構造、つまり<行為>→<変化>→<状態>という行為連鎖に基づく意味構造の観点から、主に<変化>→<状態>を表す変化動詞を中心に完了の「シタ」形の形成に関与する動詞の意味概念、そして「スル」形の修飾関係の意味及び後続する名詞との関係を考察する。

## 1. はじめに

動詞連用形と名詞が複合した「動詞連用形＋名詞」型の複合名詞では動詞が名詞を修飾し意味的に名詞の性質、状態を叙述したり意味内容を説明したりする働きがある。具体例を見ると、動詞連用形が基本形の「スル」形に取れる(1)のようなタイプと完了の「シタ」形に取れる(2)のようなタイプがある(aは自動詞の例で、bは他動詞の例である)。

- (1) a. 働き蜂、遊び仲間、渡り鳥、流れ星、鳴き声  
b. 釣り竿、引き戸、折り畳み椅子、掛け布団

---

\* 本稿の執筆にあたり長谷川信子先生からたいへん貴重なコメントをいただいたうえ、内容にも細かくご指導いただき、そして修正していただいたことを心より厚く御礼申し上げます。

- (2) a. 枯れ木、曇り空、濡れタオル、落ち葉、抜け毛  
b. ゆで卵、干しぶどう、ひき肉、置き傘、造り花

(1)に挙げた複合名詞では、動詞が名詞に対する修飾関係は「目的、手段、機能、概念」といったさまざまな意味関係（つまり「外の関係」）を表しており、この「スル」形はテンスにもアスペクトにも関与しないものだと考えられる。（寺村:1984:207-208）このことから(1)の動詞はその意味的性質に制約されることなく自由に名詞と組み合わせられる。例えば、「働き蜂」は「働く蜂」として蜂のタイプを、「釣り竿」は「釣りに用いられる竿」を、「引き戸」は「引いて開けるタイプの戸」を、というように様々な解釈を持ち、いずれも名詞の性質を特徴付けているのである。

これに対して、(2)の場合は、動詞が名詞の主語や目的語の状態変化を描写する変化動詞であるため、その動詞連用形、つまり「枯れ木」の「枯れ」や「ゆで卵」の「ゆで」などが「枯れた木」や「ゆでた卵」といった完了の「シタ」形の意味を表すことができると影山（1996:137）は説明している。影山（1996）はこの「枯れた木」「ゆでた卵」のような連体修飾用法の「シタ」形を通常名詞の前に置かれて形容詞的に働くことから「完了形容詞」と呼んでいる。

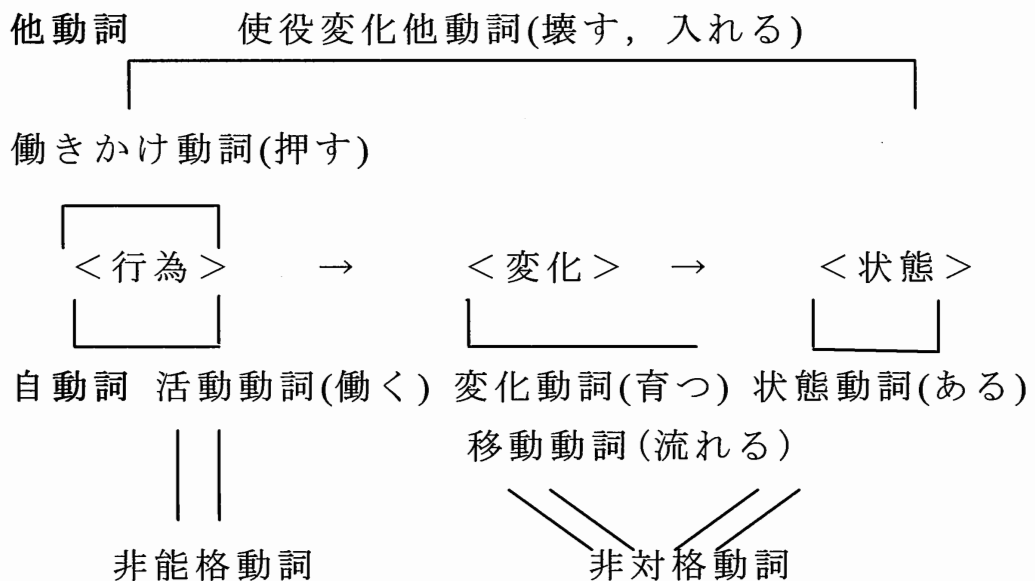
上述のことから、動詞は連用形だけで名詞と複合語を作る場合、その動詞連用形が「スル」形として機能しているか、「シタ」形になるかは動詞の意味的性質と修飾する名詞の意味と密接に関わっていることが分かる。動詞の意味構造に関する研究はさまざまあるが、本稿では、影山（1996, 2001, 2009）の枠組みが直感的にも把握しやすく、広く言及されていることから、その影山の動詞の意味構造を用いて、「シタ」形になる動詞の成立条件を検討した上で、「スル」形と「シタ」形の違いを考察する。先ず、第2節で影山の動詞の意味構造

を見ておく。

## 2. 影山の動詞の意味構造

影山(2001, 2009)によると、動詞の意味構造は、基本的に<行為>→<変化>→<状態>という行為連鎖によって表すことができる。影山(2001)は動詞の表す意味の範囲を次の(3)に示している。

### (3) 動詞の意味範囲



(影山 2001:8)

このような意味構造から、影山(1996:100-106)は、非能格動詞<sup>1</sup>に係わる動詞は対象物の状態変化をもたらさない単純な活動(ACT)であるため、完了の結果状態を意味する「シタ」形と整合しない。したがって概念構造において非能格動詞が完了形容詞の形成にACTが関与しないと指摘している。

<sup>1</sup> 非能格動詞とは主語が意識的に制御できる動作や活動を表す自動詞で、その概念構造は、[x ACT]と示される。この概念構造のxは項構造において外項となり、統語構造では主語の位置に生起する。

一方、非対格動詞<sup>2</sup>は変化 (BECOME) および状態 (BE) の意味特徴を持つが、BE (例えば、「ある」) は現在形に継続アスペクトがあり形容詞的意味になることから、ACT と同様、「シタ」形と整合しない。したがって適格な完了形容詞を生み出すのは変化 (BECOME) の意味を表す動詞に限られると結論づけられている。

上述のことからも分かるように、＜行為＞の意味構造しか持たない自動詞 (働く、鳴く、遊ぶなど)、他動詞 (たたく、歌う、蹴るなど)、或いは＜状態＞の意味構造を表す自動詞が完了の意味を表す「シタ」形にはならないことが推測できる。このため、以下では、変化 (BECOME) の意味を表す動詞をベースとして、2.1 節で変化自動詞を、2.2 節で使役変化他動詞を取り上げそれぞれ詳しく見ることにする。

## 2.1 変化自動詞

まずここでいう変化自動詞とは影山の意味構造でいう＜変化＞→＜状態＞という過程を含む動詞の類である。この自動詞には、(4)のように抽象的な状態の変化を表す動詞(4a)と物理的な位置の変化を表す動詞(4b)とがある。

- (4) a. 縮む、乾く、曇る、枯れる、死ぬ、濡れる
- b. 流れる、進む、入る、ころがる、倒れる

(4)に関係する複合名詞を例に挙げてみると、次の(5)がある。

- (5) a. 曇り鏡、濡れタオル、荒れ模様、荒れ田
- b. 倒れ木、落ち葉、流れ星、入(り)口、逃げ道

(5a)で挙げた状態変化を表す動詞連用形が「荒れ模様」を除いて完了の「シタ」形の意味を表すものが多いという特徴が

---

<sup>2</sup> 非対格動詞とは主語の意図で制御できない出来事や状態を表す自動詞で、その概念構造は、[BECOME[y BE AT-z]]と示される。この概念構造の y は項構造において内項となり、統語構造では、目的語の位置に生起する。

見られる。このことは、(5a)の動詞は、意図性のない自然変化を表す非対格自動詞であり、結合する名詞とは内項の関係で結ばれていることによると考えられる。

一方、(5b)の位置変化を表す移動動詞では、その連用形が「シタ」形にとれるもの（「倒れ木、落ち葉」）もあれば、とれないもの（「入(り)口、逃げ道」）もある。なぜ、このような振る舞いを示すのであろうか。(5b)で「シタ」形の意味に取れる「倒れ木、落ち葉」は、(5a)と同じように内項の意味関係を持ち自然現象を示す。つまり、「木」や「葉」がそれぞれ帰着点「に」格の「地面」の意味を含み、＜変化＞→＜状態＞の意味構造を持っていると考えられ、内項yが変化後にBEの状態に至ることが観察されると言えるのである。

それに対し、(5b)の「入(り)口、逃げ道」では動詞と名詞が項関係でなく「入る、逃げる」が単に移動主体（人）が移動するという＜行為＞のみを表している。つまり、「(人が) 入る口、(人が) 逃げる道」というのは「外の修飾関係」を表しているのである。また、「流れ星」は、一見「星が流れる」というように主語と述語の項関係を持つように見えるが、これは、「落ち葉」などと違い「流れた星」という「シタ」の意味にはならない。「落ち葉」は上述したように、「落ちた場所(地面)」を含意するが、「流れ星」の「流れ」は「星の移動過程」であり「帰着点」は示しておらず、「入り口、逃げ道」同様、テンス・アスペクトに関与しない「スル」形の意味に相当するのである。

以上の観察から、状態変化の自動詞が位置変化の自動詞より完了の「シタ」形を受けやすいという傾向があることがうかがえる<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> ただし、状態変化を表す動詞といっても、「濡れタオル」と「濡れ鼠」が異なることを区別しなければならぬ。「濡れタオル」というのは「タオルが濡れている」という状態を意味するのに対して、「濡れ鼠」というのは「鼠が濡れている」という状態を表

## 2.2 使役変化他動詞

(3)の影山の意味構造からも分かるように使役変化他動詞は<行為>から<変化>、そして<結果状態または結果位置>まですべての意味範囲をカバーしているので、<結果>の部分が結果状態または結果位置と推測できる。そうすると「完了」の意味を表す「シタ」形が<結果>に関与することが容易に想定できるだろう。

(6) <行為> CAUSE<変化>→<結果状態または結果位置>

使役変化他動詞も 2.1 で扱った変化自動詞同様、対象物の状態変化を表すものと、対象物の物理的な位置変化を表すものの2タイプがある。下の(7a)が状態変化使役他動詞で、(7b)は位置変化の使役他動詞である。

- (7) a. 切る、殺す、壊す、温める、冷やす、伸ばす、消す  
b. 置く、入れる、出す、掛ける、注ぐ、移す、運ぶ  
(影山 2001:8)

(7)の動詞と名詞を組み合わせた複合名詞を例にとると次のようなものが挙げられる。

- (8) a. 焼き芋、揚げ豆腐、冷やし中華、焼き網、折り鶴、蒸しタオル、刻み昆布、消しゴム、切(り)口、割り箸  
b. 置き傘、入れ墨、植(え)木、敷き板、落とし物、落とし穴、入れ歯、張り紙、塗り箸、塗り薬

(8a)と(8b)を見比べると、どちらも「スル」形と「シタ」形の両方を取れることがわかる。例えば、同じ動詞であっても、「塗り箸」「焼き芋」の動詞連用形は「塗られた箸」「焼き上がった芋」と同義で状態変化が生じる「シタ」形の意味を表

---

すのではなく、水に濡れた鼠のように全身がびしょぬれになることを比喩的に表現するものである。

しているのに対して、「塗り薬」「焼き網」の動詞連用形は「塗るための薬」「焼く用途を持つ網」というように状態変化を伴わない「スル」形の意味を表しているのである。このことから動詞の意味構造だけでは、「スル」形と「シタ」形の違いを説明するのには限界があると思われる。なぜ「塗り薬」「焼き網」の動詞連用形は「シタ」形にならないのか、2.1 の変化自動詞の際にも述べたが、動詞が名詞に対する修飾関係を考える際に、項関係や名詞との意味関係も考慮に入れなければならないということである。「塗り薬」は一見目的語と他動詞の関係、即ち「薬を塗る」という内項の関係のように見えるが、「薬」という対象物が「塗る」という<行為>に働きかけられるが、位置変化、つまり「どこに」という移動の到達点が欠けているため当然その結果位置が生じないわけである。そうすると、「塗る」という行為は<変化>→<結果位置>という変化過程が含意されず、(1b)の「引き戸」や「掛け布団」、(5b)の「流れ星」同様、行為(ACT)や過程のみが焦点化され、ただ「薬」の用途を説明するだけの意味機能になってしまうということである。

これに対し、「塗り箸」というのは「箸」が「塗る」という行為が到達する結果位置を表す「に」格を含意していると考えられる。つまり、「箸に(漆を)塗る」という行為連鎖の<行為>→<変化>→<状態>の全範囲をカバーしているので「(漆を)塗った箸」(漆塗りの箸とも言い換えられる)の「シタ」形の意味となるのである。

また、状態変化の(8a)では、特に調理法を意味する動詞、例えば、「焼く、蒸す、揚げる、ゆでる、煮る、炒る」などが名詞と複合するものが多く見られ、その動詞連用形がほとんど「シタ」形の解釈を受けると特徴付けられる。「焼き芋／焼いた芋、揚げ豆腐／揚げた豆腐、蒸しパン／蒸したパン、ゆで卵／ゆでた卵、煮魚／煮た魚、炒り豆／炒った豆」などが

ある。

ただ、「蒸しパン」というのは、もともと対象物の「パン」が存在しないが、最終的に結果状態として「パン」というものが現れるということから、この場合の「蒸す」は作成動詞の意味に近いと考えられる。「蒸しパン」の「蒸す」のように作成動詞の意味を含む変化他動詞も数多く存在する。このため新たな対象物を作成・出現させたりするといった意味を含む作成動詞（例えば「作る、書く、描く、建てる、編む」）も使役変化他動詞と同様に、＜行為＞→＜変化＞→＜結果状態＞という意味構造を表すことから、本稿では使役変化他動詞として取り扱うことにする。(9b) がその例である。

- (9) a. 揚げパン、折り鶴、刻み昆布、掘り井戸  
b. 造り花、建て家、描き眉、編み笠

(9)を影山の行為連鎖の意味構造で表すと、次のようになる。

- (10) <行為>                      →<変化>              →<結果>  
x が [y]<sup>4</sup> に働きかける → [y] が変化する → y が状態にある

上記の変化他動詞は、結果状態を表す「てある」構文とも結びつけられることから、連体修飾関係において「シタ」形は「てある」構文と同じ働きを持っていることが構文的にも統一的に説明できる。

- (11) a. 揚げパン → 揚げたパン → 揚げてあるパン  
b. 建て家 → 建てた家 → 建ててある家  
c. 作り花 → 作った花 → 作ってある花

以上見てきた＜変化＞→＜状態＞の意味構造を含む自動詞と他動詞では、完了の意味を表す「シタ」形は、行為連鎖の

---

<sup>4</sup> (10)において[y]は統語的に現れない項を意味する。



<行為>や<変化>の過程は切り捨てて、最後局面である<状態>を抽出する働きをすると影山(2009:145)は指摘している。逆に言えば、<状態>を含意しない変化動詞では、「塗り薬」の例でも明らかのように、完了の「シタ」形にならない。また、複合名詞内部の修飾関係において動詞と目的語或いは対象主体 y が持つ内項関係があるかどうかで判定することも重要である。これに対し、「スル」形の意味で作った複合名詞は、動詞と名詞の関係は基本的に内項関係を持たず複合されるものであると特徴づけられるといえる。

### 3. 「スル」形の複合名詞

まず「スル」形の意味に取れる動詞が名詞と複合してどんな意味関係があるか見ておく。

- (12) a. 駆け込み乗車、聞き取り調査、立ち話
- b. 呼び出し音、干し竿、助け船、受け皿、すり鉢
- c. 休み時間、拭き掃除、いじめ問題、回り道、寄せ鍋、ひき逃げ事件、やらせメール、招き猫

上記の例から、複合名詞の形成では、項関係ではなく、単に動詞が名詞を様々な意味で叙述するための修飾関係が見られる。例えば、(12a)に挙げた「駆け込み乗車」「聞き取り調査」の「駆け込み」「聞き取り」は、それぞれ「乗車」の様態(「走って電車に入る様子」)や「調査」の方法(「聞き取りによる調査」)を表していて、「立ち話」も「立ったままする話」という方法、手段の意味で名詞を修飾していることが分かる。(12b)に挙げた複合名詞はその「スル」形が修飾する名詞の用途や目的を表す例である。「～するための名詞」と言い換えられる。そして、(12c)における修飾関係は、動詞が単に名詞の意味概念や性質を説明するものの類である。例えば、動詞が名詞の「時間」と複合した例をとってみると、「ゆで時間、乗

り換え時間、仕上げ時間、残り時間」といったように、「時間」の前にさまざまな動詞をつけられて説明できるし、しかも生産的に作られるのである。

この点では、「名詞＋動詞連用形」型の動詞由来の複合名詞にも共通すると考えられる。例えば「目的語＋他動詞」のタイプ「子育て」「穴埋め」というような複合名詞にさらに名詞を付け加え「名詞＋動詞連用形＋名詞」という構造で、「子育て支援」や「穴埋めドリル」が組み合わされる。このような複合名詞は、「子供を育てる支援」「穴を埋めるドリル」というように「動詞連用形＋名詞」型と同じ意味機能を果たすことができ、そして生産的に作られる。このほか「主語＋自動詞」のタイプ「色褪せ防止」「地すべり災害」や、名詞「に」格を取る「乗り物酔い対策」「パソコン切り替え機」のタイプも自由に組み合わされる。

これに比べて「シタ」形の意味を含意する「動詞連用形＋名詞」の複合名詞は動詞の意味や項構造的な制約があるため、「スル」形とは対照的にそれほど生産的ではないと思われる。

- (13) a. サイン入りボール、漢字混じり表記
- b. 肉詰めピーマン、ごま摺り団子、税抜き価格
- c. 機械編みデザイン、レンガ建て記念館、手作りパン

(13a)に挙げたのは自動詞の例で、「サインの入ったボール」「漢字の混じった表記」というように動詞「シタ」形が名詞を修飾する関係で、修飾される名詞「ボール」も「表記」も構文において「ボールにサインが入っている」「表記に漢字が混じっている」というように帰着点の「に」格でしめされている。他動詞例の(13b)の「肉詰めピーマン」も同様に「ピーマンに肉が詰めてある」といえる。これに対して(13b)の「ごま摺り団子」「税抜き価格」は「ごまを摺った団子」「税を抜いた価格」となるが、動詞と修飾名詞の関係は「団子のごまが

摺ってある」「(その) 価格の税が抜いてある」という包含関係になっていることがわかる。一方、(13c)の作成動詞では「機械」や「レンガ」が道具、材料を表すため、「機械で編んだデザイン」「レンガで建てた記念館」となることから、他動詞の目的語である「デザイン」「記念館」は結果状態変化の対象として見なされて動詞とは内項の関係を持つわけである。つまり、「シタ」形の複合語は項関係という制限を持つのである。

#### 4. 「スル」形と「シタ」形の成立条件

第2節で、完了の「シタ」形を生み出す変化(BECOME)動詞、つまり非対格自動詞(<状態>を除く)と使役変化他動詞(作成動詞も含む)を取り上げ、「スル」形と「シタ」形の意味に相当する複合名詞を考察し、第3節では動詞が名詞に対する「スル」形の意味関係を重点的に見てきた<sup>5</sup>。こうなると、「スル」形と「シタ」形の成立条件をそれぞれ以下(14)、(15)のようにまとめることができる。

##### (14) 「スル」形

動詞の意味構造	制約なし (<状態>を除く)
アスペクト	関与なし
項関係	なし
名詞との意味関係	①名詞の概念、属性を説明する ②名詞の用途、機能、目的などを叙述する ③名詞の方法、手段を説明する等

<sup>5</sup> ここで一つ説明しなければならないのは、これまで述べてきた「スル」形の意味はアスペクト的な意味機能を持たないものであるが、「有り金」「居場所」のような複合名詞には、「ある金」「居る場所」の「ある、居る」は<状態>を意味している動詞もあるということである。ただ本稿の目的は<状態>以外の動詞なので「スル」形に入れないことにした。

(15) 「シタ」形

動詞の意味構造	<変化>→<状態>の意味を含む動詞
アスペクト	完了を表す
項関係	あり（内項）
名詞との意味関係	名詞の状態を描写する

(14)と(15)を見比べると、「スル」形の意味を含意する複合名詞と「シタ」形を含意する複合名詞とでは動詞の意味からも、名詞との意味関係においても対応する項目が一つもなく異なっていることが分かる。

とはいえ、すべての「動詞連用形＋名詞」型の複合名詞が、(14)と(15)のようにはっきりと分類することができるわけではない。周知のように、ひとつの動詞には2つ以上の意味構造があるものが数多く存在するため、「スル」形と「シタ」形の両方に取れる例も多いと予測できる。また、名詞との意味関係によって「スル」形も「シタ」形も可能な場合もある。例えば、次の(16)がそれである。

- (16) a. 割り箸→割った箸／割る箸  
植(え)木→植えた木／植える木
- b. 刻み昆布→（細かく）刻んだ昆布  
刻み鞆→（精巧に）刻んだ鞆

(16a)の「割り箸」では、「割れ目がつけてある箸」という意味解釈なら「割った箸」という「シタ」形で割れた状態を描写することもできるが、その一方で「割れ目を入れてあり、使うときに二つに割る箸のこと」という<行為>だけの意味構造で形成された複合名詞になることから、「割り箸」はつまり「割る箸」で割って使うという「スル」形の意味内容として捉えられるのである。同様に「植(え)木」も「植えた木」(植

えてある木)の「シタ」形にも取れるし、「植えるための木」の「スル」形の意味にも取れる。

さらに、「刻む」のような動詞は「刃物で物を細かく切る」という「切る」動詞の意味と切れ目をいれるという「彫る」動詞の意味もあるので、前者は「刻み昆布」に見られるように状態変化を表す他動詞であるのに対して後者は「刻み鞘」のように作成動詞の使役他動詞として理解できる。

このように、＜変化＞→＜状態＞の意味を含意する動詞では、「スル」形と「シタ」形の判定は難しく、両者の違いを区別するには、単に動詞の意味を考えるだけではなく、名詞の意味内容や＜結果状態の焦点化＞か否かによって複合されるものが違ってくることからそれらの要素も考慮に入れる必要があると思われる。

## 参考文献

- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 くろしお出版.  
影山太郎. 2001. 『動詞の意味と構文』 大修館書店.  
影山太郎. 2009. 『形容詞・副詞の意味と構文』 大修館書店.  
工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房.  
寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版

201620

上海市松江区文翔路 1900 号

上海对外貿易学院 外国語学部 日本語学科

*zhengtxy@hotmail.com*